

第16回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同推進賞受賞者

標記の賞につき、会員の皆さまによりご推薦いただいた候補のなかから選考の結果、2022年度は学会賞該当なし、推進賞として下記1件の授賞を決定いたしました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

◆第16回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

[賞の概要]

『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』、その他の雑誌に掲載の論文・記事、図書、データベース、展覧会、ウェブサイトのなかから優れたものを選出。会員に限らない。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

受賞	該当なし
----	------

◆第16回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞

[賞の概要]

アート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関を選出。会員に限らない。

受賞	<p>山根貞男 氏</p> <p>『日本映画作品大事典』（三省堂、2021）の編集および長年にわたる映画に関わるドキュメンテーション活動に対して</p>
授賞理由	<p>映画評論家であり、著述家である山根氏は、22年間という長い年月をかけて『日本映画作品大事典』を編集され、このたび刊行が実現した。本書は、1908年から2018年までを対象として、映画監督約1,300名、作品数約19,500本を収録する1,072ページに及ぶ大著である。戦前、戦後の日本映画の全盛期に制作された劇映画を中心に、100年の歴史を有する日本映画の作品データが一望できる。公開年、制作会社、出演者等の基本データに加え、約100字から400字の丁寧な内容解説を含む。さらには、フィルムサイズ、撮影者、スタッフ等の情報も掲載されており、各作品の詳細な事実を知ることができる。監督名を見出しとし、各人のフィルモグラフィとなる作品を公開順に配列する本書は、監督の人名事典としての役割も果たしている。巻末には、全作品索引とシリーズ索引を付して、作品を縦横に関連づけているところも評価できる点である。</p> <p>本書は、映画が文化遺産として認識されながらもデータ整備が追いつかない現状において、キネマ旬報社や現・国立映画アーカイブをはじめとする映画データベースの蓄積データを活かし発展させた成果と言えよう。複数のデータやアーカイブ資料を調査し、流布されてきた情報の校訂に努め、作品情報、監督情報を統合して、あらたな基礎資料として提示したことの意義は大きい。</p> <p>この公刊は、監督解説、作品解説にあたった約50名の執筆陣、そして三省堂の編集部担当者など、さまざまな協力者の貢献で実現している。しかし、本事業は、映画評論家として活躍する一方、フィルム収集家たち取材し、日本映画の発掘にも携わった経験を有する山根氏の揺るがない編集方針と牽引力なくしては遂行されえなかった成果にほかならない。</p> <p>山根氏の22年にわたる事典編集および、長年にわたる映画に関わるドキュメンテーション活動に対し、第16回野上紘子アート・ドキュメンテーション学会推進賞を授与する。</p>